

語りつづける、届くまで

1

お年寄りの嗜好品、特に菓子類の好みの傾向を、何年か前にササヤ食品がアンケートで調べたことがあった。それによると、甘味類については、アメ、ケーキ、和菓子とその嗜好の幅は広がったのだが、塩味については、圧倒的に米菓、つまりセンベイ、アラレの類が上位を占めた。

問題は、米菓と切っても切れない歯ごたえである。ふにゃふにゃのしけたセンベイは、米菓を食べたという気になれず、といって多くが歯に問題を抱えるお年寄りに、カチカチの堅焼きセンベイは敬遠される。

勢い、「おせんべいは食べたけれど、歯がね……」となるわけだ。

そこで昨年、ササヤ食品は、お年寄り向けとは決して謳わずに（これもアンケートによって得た貴重な情報だ）「超薄焼き・パリパリ」と「ふわふわアラレ・やわらくん」を発売した。パツケージにはもちろんのこと、「歯の悪い方でも召しあがれます」とは書いていない。お年寄りがなにより嫌うのは、無意味な同情や歩み寄りだからだ。

勝手に見つけて、勝手に愛食して下さい、という企業の姿勢が大切なのである。

早い話、「長生きして下さいね」という言葉は、お年寄りの耳にあまり心地よくないのだ。その言葉には、「あんたずいぶん生きてるけど、まだまだ死にそうもないね」という響きを感じるらしい。むしろ、「まだガキじゃないか」とか「死ぬに死ぬないね」といわれるほうが嬉しい、という説がある。

とはいえ、お年寄りの行動範囲は狭く、また一度かたまってしまった商品の選択をかえさせるのは簡単ではない。

そこでササヤ食品宣伝課は、草の根作戦を展開することにした。各地の老人会や老人ホームに慰問に赴き、この「超薄焼き・パリパリ」と「ふわふわアラレ・やわらくん」をお年寄りたちに試食していただくというわけだ。

坂田勇吉が担当したのは、東京二十三区うちの城東地区、つまり下町である。この作戦には、もうひとつ、企業イメージの向上という狙いもある。一度限りの慰問ではそれは果せない。三カ月間、計六回、同じ老人会、ホームを訪れ、その人たちと交流して顔なじみにならなければならぬ。

そのためには「武器」が必要だ。手みやげにはササヤ食品の製品とはいえ（実は手みやげでも何でもなく、それを配ることこそが狙いのだが）、お年寄りと仲よくなるのは簡単ではない。

ただ通りいっぺんに挨拶して、一時間から二時間話し相手をするぐらいで慰問になると思っていたら大まちがいである。そんな低級の慰問など、誰も喜びはしない。「ハイ、ハイ」と頷き、

てきとうにあいづちを打つような見ず知らずの若造と話すくらいだったら、テレビを眺めているほうがよほどましなのだ。こいつ、腹の中で年寄りの相手はつまらないと思っっているにちがいない。こんな奴の会社で作ったセンベイなど金輪際、買ってやるかとなる可能性すらある。

ある者は奇術を覚え、ある者は昭和二十年代の流行歌をギターで弾き語りし、ある者は落語を一席うかがう、といった具合で、なかなかたいへんな草の根作戦になった。

坂田の場合、武器は将棋である。もう亡くなった祖父が坂田の名付け親なのだが、大の将棋好きで、坂田三吉にあやかっていたのが名前の由来だ。

小学校にあがる前からその手ほどきを受け、中学時代は将棋クラブに身をおいた。文京区で風呂屋を営んでいた祖父の趣味は、この将棋と酒だった。中学のときに祖父は他界したが、連れ合いを早くに亡くした祖父の相手はもっぱら坂田の役割だった。

祖父が亡くなったあと、サラリーマンだった父は仕事を辞め、風呂屋を潰してコンビニエンスストアを始めた。コンビニエンスストアの上は賃貸マンションで、店番は母とアルバイトの仕事、父は管理人をやりつつ、カラオケとゴルフにいそしんでいる。

老人会や老人ホームには、必ずといってよいほど、将棋や碁好きがいる。坂田は碁も打つが、将棋ほどではない。将棋のほうは、アマ初段といった腕前なので、そうそう負けることはなく、対局後、感想戦をすることでさらにお年寄りと親しくなったりもできる。

何のことはない、中学時代に戻ったようなものだ。

元来が淡泊な性格で、競争を好まない坂田にとって、将棋は唯一、趣味にできた勝負ごとである。今年はいよいよ三十の大会にのるが、結婚の予定もまるでない。

これまで恋愛に縁がなかったわけではない。ただその恋愛にはいつも、とんでもない苦難がセツトになっていた。

一度目は三年前の大阪出張で、新製品のサンプルが入った鞆をまちがって奪われ、取り返すためにやくざと死にもの狂いになって追いかけてこをした。本当に殺されそうになり、涙と震えがとまらなかつたものだ。そのとき、ミナミでホステスをしている真弓まゆみという女性に助けられ、親しくなった。

二度目は昨年の北海道だった。新入社員を連れた研修旅行の帰り、ロシアマフィアによる麻薬密輸事件に巻きこまれ、あわや蜂はちの巣にされそうになった。そのときは、コーシカというロシア人少女を助け、仲よくなった。

が、どちらも遠距離恋愛である上に、互いの生活環境がちがいすぎて、長つづきしなかった。以来、恋愛らしい恋愛はしていない。ただ最近、ちょっといいなと思う女性が現われた。

通称「サッコさん」、NPO法人「つるかめ会」のボランティア小川咲子おがわさきこ、だ。年は坂田と同じで、ふだんは軽貨物トラックの運転手をしている。バツイチで口は悪いが、面倒みがよい。

「つるかめ会」は、坂田が今、通っている老人会の名でもあった。東京の東の外れにある鶴亀銀座商店街の「振興会館」で週に一度、午後一時から五時まで近くのお年寄りが集まる会だ。

鶴亀銀座商店街と京葉道路をはさんだ反対側には私営の老人ホームがある。「東江苑」というこの老人ホームからも、元気なお年寄りがこの「つるかめ会」には参加していて、多いときは三十名近くが振興会館にやってくる。その世話をしているひとりが小川咲子だ。

化粧はなく、いつもジーンズだが、浅黒い顔の目鼻立ちは整っていて、どこか東南アジアの

血がながれているような大きな瞳に、坂田はこっそり惹かれていた。

口を開くと、男勝りの口調で、

「なんだよ、じっちゃん、まだ生きてたのか」とか、

「しょうがねえな、オレに貸してみ」

などといって世話を焼いている。それは決して押しつけがましいボランティア精神からではなく、感謝や感動を求める節はかけらもない。

咲子は初め、坂田を「センベイのセールスマンかい」と厳しい目で見ていた。が、ふた月を超えたあたりから微妙に変化した。

きっかけは、ユキオさんという「つるかめ会」のメンバーだった。ユキオさんは地元の独居老人で、元トビという職歴のせい短気で口が悪い。何かあるとすぐに喧嘩腰けんかかごしになるため、会の問題児だった。このユキオさんが将棋好きで、けっこう強く、勝つと悪しざまに相手あほを罵る癖がある。将棋で負かされ、「馬鹿だ、間抜けだ、ウスノロだ」とやられるのだからたまらない。その上、肩に彫りものが入っていて、別に威す気もないのだろうが、ちらつかせたりする。

坂田が二度目に「つるかめ会」を訪れた日、将棋を囲んだのが、ユキオさんだった。自信満々で坂田に挑み、敗れ、さらに挑み、また敗れた。

その後の感想戦で、すっかり神妙になったユキオさんに、二人のメンバーが歩みよった。

教授というあだ名と姫さんというあだ名の、どちらも「東江苑」の入所者だった。二人は身寄りがいないことから、自発的に老人ホーム入りしていて、教授は元大学の先生らしく、ときおり

難しいことをいうが「つるかめ会」の精神的な中心メンバーで、姫さんは、元大部屋の時代劇女優だったという噂のあるおっとりした女性だ。二人とも七十代の半ばでユキオさんより少し年長である。ユキオさんが孤立しているのを気にかけていて、打ちとけるきっかけを捜していたのだと、坂田はあとから聞かされた。

そうして三度目に「つるかめ会」を坂田が訪れると、ユキオさんはすっかり教授や姫さんと仲よくなっていて驚かされた。そのことで、咲子は坂田に少し心を許してくれたのだ。

「ユキオさんの刺青見て、てっきり腰抜かすと思ってたけどね」

「つるかめ会」がひけたあと、連れていかれた居酒屋でホッピーのグラスを傾けながら、咲子がいった。もちろん二人きりではなく、ボランティアのうち、都合が許す同志が、毎週おこなっている打ち上げに、初めて坂田は誘われたのだ。

「ああ、子供の頃、うちは銭湯やってたんで、よく刺青をいれたおじいさんとか見ていましたから」

坂田はいつて笑った。

「でも、教授と姫さんが、あんなにユキオさんと仲よくなっていたのは驚きでした」

「ここだけのないしよだけど、ユキオさんはさ、前から姫さんのこと好きだったのよ。姫さんはみんなのマドンナじゃない。だからムカついていたんだよ。でも仲よくなるきっかけがあったから。ユキオさんはさ、単純なの。ガキ大将みたいなもんで、こいつには勝てねえって思うと、あっさり相手を認めるのさ。その点では、あなたには感謝している」

「そんな風にいわれると、かえってこそばゆいです。ユキオさんは、似てはいないけど、僕のお

じいちゃんをちょっと思いだしますし」

「ボクっていうなよ。おかまみたいだぞ」

「すいません」

「あやまるなって」

いいながらも咲子はにこにこしている。黒くて大きな瞳がきらきら輝くのを、坂田はうっとり見つめた。

「そういえば、おかまで思いましたんだけど、玉井さんて、誰の身内？」

横で焼きとんをかじっていた、ボランティアの桑山が訊ねた。区役所を停年になり、「つるかめ会」を手伝っている大の酒好きだ。

「ああ、誰だろう」

咲子が首をかしげた。坂田にも玉井のことはわかった。「つるかめ会」には、ボランティアの他に、参加老人の身内が、何人か手伝いに来ている。食事や飲みものの世話をしたり、「演物」と呼ばれる月に一度の余興の裏方をするためだ。

玉井は大柄だが派手な洋服を着て、ときおりおネエ言葉をしゃべる中年男だった。キティの絵のついたキャリーケースをいつもひっぱってくる。

正体不明だが、金もっているようすだ。

「たぶん、節子さんだと思うんです」

坂田がいうと、驚いたように咲子がふりむいた。

「なんで？」

「一度、会場のすみっこで玉井さんが封筒を渡しているところを見ました」

節子さんというのは、無口な地元のメンバーだ。八十を過ぎていて、車椅子がなければ移動できない。たいい咲子が家まで迎えにいつている。

「えー、オレには一度もそんな話、節子さんしたことないよ。ていうか、あんたよく、そんなシーン見てたね」

「たまたまです」

坂田はいつた。節子さんはいつも無表情にっていて、めつたに笑ったり人と話すことはない。といって別に他のメンバーに冷たくあたるというわけでもなく、「つるかめ会」にやってくる老人の半分は、そうしたおとなしい人々だ。

年をとると恐いものがなくなる、という人もいるが、逆に若い頃以上に引っ込み思案になる人もいる。

お年寄りだからといって十把ひとからげに扱うことはできない。子供だってそうだ。

あたりまえの話なのだが、子供とお年寄りに対して、世の中にはひとくりにしようという空気がどこかある。どちらにも属さない大人には、個性に気を使う風潮があるのに、だ。

それは結局、子供やお年寄りの個性は無視しやすいからだ、と坂田は思う。

子供の「嫌だ」という言葉を、大人は「ワガママいわないの」と封じこめる。同様に、お年寄りが個性を主張することに対して、「年寄りのワガママ」と批判的な目を向ける傾向がある。

敏感なお年寄りは、そう見られるのが嫌で、必要以上に自分を殺し、主張をしなくなる。おとなしくて扱いやすい人を演じるのだ。

見かたをかえれば、それは周囲やボランティアに対し、心を許していない、ということでもあ

る。

坂田がそういうと、咲子は目をみはった。

「サカタ、わかってんじゃない！ あんた、たいしたもんだね」

孤独死をするお年寄りには、そうした「おとなしい人間」を演じている人が多いのだ、と咲子はいつた。

「本当に無口なのはいいんだ。でも喋りたいのに喋れなかったり、うるさい人だと思われたくなくて、我慢してにこにこしてる人っているんだよね。ユキオさんみたいに主張の激しい人がいると、そういう人は結局、どんどんうしろにさがって、その他大勢になっちゃう。でも心の中じや、それが気に入らないって思ってるんだ」

「でも、だよ。私たちがひとりひとり全員の気持をわかってあげる、なんてことは不可能じゃない。本当はどう思ってますか。『つるかめ会』は楽しいですかって訊いて回れないわけだからさ」

モツ煮ののったスプーンを掲げていつたのは、大河原おおがわらというボランティアだった。大河原は鶴亀銀座商店街でも老舗おきなの履物屋の旦那だ。五十五になるが独身で、母親が「つるかめ会」の創設メンバーだった。去年亡くなったらしいが、その後もボランティアをつづけている。

「そう。だからオレは、教授と姫さんが大事だと思うんだよね。あの二人はさ、仲間外れができないように、すごく気をつかってくれるじゃない。それで仕切ろうっていうのでもないから、立派だよ」

咲子がいつた。その通りで、二人はいつもにこにこしながら、きているメンバーひとりひとり

に目を配っている。

「ユキオさんがさ、打ちとけたのも、サカタのおかげがあつたにせよ、あの二人の働きかけは大きいよ」

「確かにそうなんだけど、ひとつ問題はさ、あの二人がホームの人ってことなんだ」

桑山がいうと、全員が黙った。やがて、

「それは、まあ、そうなんだよ」

歯切れ悪く、大河原がつぶやいた。

三度の訪問で、坂田も何となく気づいていた。地元在住のお年寄りとは、「東江苑」に入所しているお年寄りのあいだには、見えないミゾがある。無理はないこととはいえ、何十年と鶴亀銀座周辺に住んできた人にとって、「東江苑」の入所者は、よそ者なのだ。さらにいえば、微妙なやつかみもある。

「東江苑」の入所者は、具合が悪くなれば職員が病院まで連れていってくれるし、食事や入浴の世話もみてもらえる。ひきかえ、大半が独居生活の地元のメンバーは、自分が動けなくなったら死んでしまうかもしれないという不安を抱えて暮らしているのだ。

「心の中じゃ、『東江苑』の入所者をいいご身分だ、と思ってるのじゃないかな」

桑山がいった。

「入りたくとも入れない人もいるわけだから」

「全員が全員、そうじゃないと思います」

坂田はいった。

「経済的な理由じゃなく、人といっしょに暮らすのが苦手だって人もいるのじゃないですか。何十年もひとり暮らしをしていると、自分の生活リズムが完成されてしまっていて、それを集団生活にあわせていくのがつらいと思つているような人です。そういう人は、入所者をうらやましいとは思つてないのじゃないかな」

「体が元気なあいだは、ね。オレだってできれば自分の家でぎりぎりまで暮らしていたいよ。それで、ある日ぼっくり死ねたら理想だね」

咲子がいうと、

「サッコがそれを考えるのは、まだ早すぎるって」

大河原が首をふった。

「私だよ、私。それを考えなけりゃいけないのは」

「大河原さんは、オレらが面倒みてあげるよ」

咲子がいうと、大河原は嬉しそうに笑った。

「本当か。私だけ、シモの面倒、駄目っていうなよ」

「うーん、それは桑山さんに頼むかな」

「おいっ」

大笑いになった。ひとしきり笑うと、桑山さんがつぶやいた。

「ところでさ、教授と姫さんて、やっぱり恋人なのかな」

全員が唸った。

「そうじゃ、ないの」

咲子がいうと、大河原が声を低めた。

「私、教授には奥さんがいるって話、聞いたことあるよ」「ええっ」

「体が悪くっていうか、寝たきりでずっと入院してるらしい」

「そうなのかよ、うーん」

咲子は唸った。

「まあ、いいじゃないですか。その人その人の事情があるのだから」

坂田はいった。咲子が眉根を寄せた。

「お前さ、どうしてそう、大人なわけ」

「え？」

「まだ若いのにさ、やけに老成してるよね」

「そうですか」

「サラリーマンやってつと、みんなそうなるのかね。そんなことないだろ。サカタにだって、心に秘めた熱いものはあるんじゃないのか」

坂田が唸る番だった。思わぬ形で予先が向かってきたが、咲子に個人的なことをいわれるのは少し嬉しい。

「なくはないさ、なあ坂田君」

大河原がいう。

「なんかさ、本当、サカタって、これまでなあーんにも波風のない人生を送ってきたように見え

るんだよね」

坂田は苦笑した。大阪と北海道で巻きこまれた事件は波風どころの騒ぎではなく、大嵐だった。だがそれを人に話したことはほとんどない。

「いいじゃない。だからこそ、坂田さんは優しいんですよ、ねえ」

桑山も仲間に入った。

「オレはサカタに訊いてるの」

「まあ、そうですね。だいたい地味な人生です」

「冒険したいとか思わない？」

「冒険ですか」

「自分らしくないことをしてみよう、とか。ふだん全然、縁のない場所に行ってみたい、とか」

「それが冒険ですか」

「お、いうねえ」

大河原が目を細めた。

「じゃあ何がサカタにとって冒険なんだよ。『つるかめ会』に参加したとかいうなよ。それは仕事なのだから」

「うーん、先回りされるとつらいな」

坂田は苦笑した。

「だろ。オレが見てるサカタって、いい奴なんだけど覇気がないっていうかさ、どこか頼りなさげなんだよ。実際はわかんないよ。けっこう人を観察してるし、頭はいいかもって思うときもあ



る」

「将棋強いし」

大河原が茶々を入れる。

「うるさい。だからこそよけい、サカタを見てると、いらつとくるときがあるんだよ。ユキオさんなみにやれとはいわないけれど、もつと自分を主張すればいいのにつて」

咲子は口を尖らせた。桑山がにやにや笑っている。

「何笑ってるの、桑山さん」

咲子がにらんだ。桑山はあわてて首をふった。

「いや、何でもない、何でもない」

## 2

「サッコちゃんはさ、たぶん坂田さんのことが好きなんだ」

居酒屋をでて四人が別れ、坂田が駅に向かって歩きだすと、桑山が小声でいった。

「えっ、嘘ですよ」

「サッコちゃんてユキオさんみたいなのところがある。ああやって坂田さんに難癖つけるってのは、本当は気に入ってる証拠。だから気にしないで」

桑山は坂田の肩をぽんと叩き、

「そいじゃ、お疲れさま！」

と、またいでいた自転車のペダルを踏み、走り去った。

それを見送り、坂田は息を吐いた。咲子が自分を好きだなんて信じられない。むしろおとなしい男なんて眼中にないタイプに見える。

まあ、それはそれでしかたがない。こればかりは性格なのだ。

半分近くシャッターの降りた商店街を歩きだした。アーケードのある、古びたこの鶴亀銀座商店街を歩くのを坂田は嫌いではない。八百屋や肉屋、荒物屋や本屋など、一軒一軒は小さいが、大型スーパーなどに比べると生きている人の営みをはっきり感じられる。店の奥の一段高い居間でテレビの画面が瞬またいていたり、家族が食事をしていたりすると、さらにそれを強く思う。

スーパーは、そこで働く人にとっては職場ではない。商店街の小さな店は、職場であると同時に住まいだ。そこで暮らし、生計を立てているのがはっきり伝わってくる。

たぶん自分も似た家に生まれ育ったことが、そう感じる理由なのだろう。コンビニエンスストアに転業してしまったが、銭湯だった我が家のほうが坂田は好きだった。

「ちよつと」

駅への階段を登りかけたところで声をかけられ、坂田は立ち止まった。

「あなた、何ていったっけ、センベイ屋さん」

ふりむくと紫色のウロコのような派手な革ジャケットを着けた男が立っていた。髪は短く刈りあげ、右手にキティ柄のキャリーケースをひっぱっている。

たった今、居酒屋で話題になったばかりの人物、玉井だった。

「あ、玉井さん。坂田です」

「やだ、あたしの名前知ってるんだ」

玉井は目を丸くしていった。

「ええ。演物のときにお目にかかりました」

「嬉しいわ。名前を覚えてもらえて」

玉井は体をくねらせた。目の細い大男がすると不気味だ。驚いたような顔で通りすぎる人もいる。

「今、帰り？」

「えっと、ボランティアの方たちの打ち上げに誘ってもらえたものですから」

「そうなんだ。坂田くんはどこ住んでるの」

「文京区の白山はくえんです」

「いいとこね。ねえねえ」

いって、玉井はあたりを気にするそぶりを見せた。

「ちよっと時間、いい？」

「時間、ですか」

「頼みたいことがあるの。十分くらい、そのへんでお茶しない？」

玉井はいった。とまどったが、終電を気にするような時刻ではないし、断わって気分を害されても困る。坂田がササヤ食品の宣伝マンだというのを玉井は知っているのだ。

ササヤ食品の宣伝マンは感じが悪いといわれてしまっただらまづい。

「わかりました」

坂田は頷いた。

「よかった。じゃ、いこ」

玉井はにっこり笑って、坂田の腕をとらなばかりの勢いで、駅の外へと押しやった。

一瞬、不安になる。玉井がゲイかどうかもわからないし、またそうだからといって特に悪い感情も起こらないが、

『あなたがタイプなの』

などといわれたらどうしよう。ササヤ食品の名誉めいよのためにとこまでおつきあいすべきなのだろうか、などという考えが頭に浮かぶ。

「あそこでいいわね」

玉井が指さしたのは、駅前のビルの二階にある喫茶店だった。コーヒーチェーンに押され、店内ではすっかり数が少なくなった純喫茶の看板をかかげる「ブラジル」という店だ。

入ってみると意外に店は混んでいた。若者の姿はあまりないが、中高年のグループがそここで話しこんでいる。

窓ぎわの二人席で坂田は玉井と向かいあった。

「コーヒーでいい？ ジャブレンドふたつ」

歩みよってきたウエイトレスに玉井は注文して、ジャケットから煙草たばこケースをとりだした。ルイ・ヴィトンだ。

「煙草いいかしら」

「あ、どうぞ」

小さな銀色のライターで火をつけ、パチリと音をたてて蓋を閉める。

「ごめんなさいね、疲れているところを無理いっちゃって」

ふうつと煙を吐き、玉井はいった。

「いえ」

「あたしも月に二回は母親に会いにこようと思ってるの。別にいつきたっていいのだけれど、家に行く二人きりじゃない。そうするとちよつとつらいのよ。ほら、こんな風だからさ、けっこう母親もいいいことがあるわけ。『つるかめ会』でだったら顔をあわせても短くてすむじゃない。お互い何となく、『元気だった？ 元気だよ』で、格好がつくから。助かってる。母親のことは気になるし、でもしよつちゆう二人きりになりたくないし、で」

何となくその気持はわかる。坂田は頷いた。

「あなたは身寄りにお年寄りがいるの？」

「今はいません。中学生までは祖父がいっしょに住んでいましたけど」

「ご実家は東京？」

「そうです」

「おじいさんはどんな人だった？」

「お酒が大好きで酔っぱらうと口が悪い人でした」

坂田は微笑んだ。

「今笑ったわね。つまりおじいさんが好きだったんだ」

「ええ。憎めないところがあつて。将棋を教えてくださいました」

「将棋。そういえば、あなたよく将棋してるわよね。あのガサツなおやじ、何てつたっけ、スミ入ってる——」

「ユキオさんですか」

「そうそう。うちの母親なんか大嫌いつていつた」

「ちよつと似ているかもしれません」

「あなたのおじいさんと？」

「はい。本当は人なつこくて皆と仲よくなりたいのに、すぐに意地になつて悪口いつたりするんです。祖父もそんな感じで、家の中であまり相手をしたがる人がなくて、僕がもつぱらその役でした」

「えらいじゃない。中学生で年寄りの相手なんて。そうか、だから『つるかめ会』にきても、うまく皆の相手をしているんだ」

「別にうまくとかは考えてません」

「あたしね、気づいたの」

玉井は身をのりだした。

「あなたがえらいのはさ、ひとりひとりを必ず名前で呼ぶじゃない。たとえばうちの母だったら、『節子さん』とか、あと『中川さん』とか『遠藤さん』とか。その人の名を聞いたり、調べたりして」

坂田は頷いた。それは意識的にしていることだった。

子供の頃、知らない大人に「ボク」と呼ばれるのが何となく嫌だった。「ボク」は記号であつ

て、固有名詞ではない。それと同じで、「おじいさん」「おばあさん」と呼ばれても、きつとお年寄りはいれしくないだろうと思うのだ。

あなたはわたしの孫じゃない、と。

「だって皆さん名前があるじゃないですか。ずっとその名前で生きてきて、いきなり『おじいさん』とか『おばあさん』とか記号で呼ばれたくないと思うんですよ」

「それ、坂田くんが考えたの？ それとも本か何かで読んだの？」

「何となくそう思っているだけです」

「すごい！」

感心したように玉井は首をふった。

「あなたすごいわ。こんな若い人がいるなんて、まだまだ日本もいける」

悪い気はしないが、大げさだ。

「たぶんボランティアだって、あなたほど考えている子はめったにいない。その能力はもっと役にたてるべきよ」

「能力、ですか」

「そう。あなたはさ、生まれもって、お年寄りの心をつかむ才能があるのよ」

「そんなおおげさなものじゃありません」

「わかってない」

玉井は腕組みした。

「自分のことがわかってないな、坂田くんは」

坂田は苦笑した。

「他に何か、年寄りを前にしたとき、考えることある？」

「年寄りだから、というレッテルでくくらないことくらいですか。年寄り扱いに慣れていて平気な人もいるけれど、嫌な人もいる。だからひとくくりにはできないと思います」

「ねえ、わたしの母親をどう思う？」

「節子さんですか？ いつもにこにこしておとなしい方ですけど、それは周りに迷惑をかけたくないという気持があるからだと思います。たぶん本当はもっといろんな人たちと仲よくしたいのじゃないでしょうか」

はあっと玉井が息を吐いた。感に堪えないというように首をふる。

「あなた天才ね」

「は？」

「坂田くんは天才よ。年寄りのことがわかってる。あなたみたいな人がセンベイ屋さんで働いているなんて宝のもちぐされだわ」

そしていきなり坂田の手をつかんだ。

「お願いがあるの」

玉井の手はやけにごつごつとして、汗ばんでいた。

「な、何です」

「教育してほしい」

「教育？」

「先生よ。あなたに先生をしてもらいたい。あたしはこう見えてもセールの講師をしている。いろんな企業の営業マンを対象に、お客様の心をつかむ話術だのセールストークのコツを伝授しているわけ。で、これからはお年寄りの顧客をどう開拓していくかが大きなテーマなのよ。今の日本で一番お金をもっているのはお年寄りなわけ。それは振り込め詐欺にひっかかる人が多いことでもわかるでしょう。ねえ、坂田くん、どうしてこんなに騒がれているのに振り込め詐欺の被害がなくなるかわかる？」

いきなり訊かれ、坂田はめんくらった。振り込め詐欺の被害があとを絶たないことは知っている。特に最近、警察や金融機関が躍起になってくいとめようとしているようだが、あとからあとから新手法が考えだされ、イタチごっこだと聞いている。

「やっぱり不景気だからでしょうか。それに誰でも簡単にできるから、やる人がなくなるのか」

「どっちも当たってる。でも一番の理由じゃない」

玉井はいった。真剣な表情をしていて、そうすると恐い。

「一番の理由、ですか」

「簡単よ。お年寄りはほったらかされているから」

坂田は恐い顔をした玉井を見つめた。

「今は核家族化して、お年寄りがまず家族と住んでいない。これは事情もあるからしかたないわ。お年寄りは地方で暮らし、若い人は都会にでていく。田舎には仕事がないから、どうしたって街にいかざるをえない。でも二日にいっぺん、いや週にいっぺんでも電話で話をしていたら、

振り込め詐欺なんておきないのよ。いつも聞いているから声がちがったらわかるし。事故をおこしたの、会社の金を使いこんだのいわれても、あれ、きのうはそんなこといってなかったのってことになるでしょう」

「なるほど」

「その上、頼りたい気持もある」

「頼りたい気持、ですか」

「そう。振り込め詐欺にひっかかる人は、たいてい苦勞して子供を育てあげ、今は別々に暮らしで、頼ってくることはまずない。今までの恩を忘れて冷たくなったり、自分の家族、つまり孫たちのほうばかりを見ているわけよ。それはおじいちゃん、おばあちゃんからすれば、もうあんたは頼りにならない、と思われているように感じる」

坂田は唸った。結婚もしていない、まして子供もいない自分には想像もつかない。自分と親の関係は、まだそこまでいいっていない。母親の手料理を食べることは今もあるし、父親ともたまに世間ばなしをする。通りいっぺんで、あたりさわりのない内容だが、サラリーマンだった父親は、あるていど今の坂田が社内でどんな環境にあるのかがわかるようだ。

「人は、頼りたいのよ」

玉井は断言した。

「頼られれば、自分には価値があると感じられる」

「それがお金の無心でも、ですか」

「他に何ができるの。むずかしい仕事の話や人間関係のことをいわれたって、遠く離れて住んでいたらわかりっこないじゃない。ずっと別れて暮らして、ろくすっぽ連絡もよこさなかった息子がいる。今じゃ自分のことより、嫁や孫のほうが大切なんだってあきらめている。なるべく息子の邪魔にならないくらいしか、できることはないって。そこへSOSの電話がかかってくる。ああ、自分もまだやってあげられることがあるんだ、頼られているんだって、うれしくなるのよ」

坂田は深々と頷いた。そうかもしれない。自分のようなおとなしい人間でも、誰かに頼られたら何とかしなければ、と思う。他人でもそうなのだから、まして子供に頼られたら、きつと役に立ちたいと考える。

「そして孤独なの。電話も手紙もこない。そんな日常で生きてたら、たとえお金の無心でも子供から連絡があったというだけで、親はまず喜んじゃう」

玉井は胸の前で手をあわせ、いった。すっかり寂しいお年寄りの気持になっている。

「だとしたら、ひどいな」

坂田はつぶやいた。

「ひどい？」

「そういう寂しいお年寄りの気持につけこむわけですよ。頼られてうれしいっていう感情に」

「そうね」

坂田は腕組みした。玉井は冷静さをとり戻したのか、新しい煙草に火をつけた。

「今まで僕は勘ちがいしてました。あれだけいわれているのに振り込め詐欺にまだひっかかる人

がいるなんて、よほどそそっかしいのだろうって。あるいは自分に限ってそんなことがおこらないうって思いこんじゃっているのだらうって。でも、玉井さんの話を聞いていると、お年寄りのそういう寂しさにつけこんだのだからわかります。心のどこかでは疑いながらも、頼られた喜びのほうが勝って、ついお金をだしてしまうんですね」

「そういうことなの。結局、すべて原因はコミュニケーション不足ってわけ。別々に暮らしていても、お年寄りを寂しくさせないような連絡手段があれば、振り込め詐欺の被害にあう人なんてもつと少ないのよ」

坂田は唸った。その通りだった。

「で、本題に戻るわよ」

いわれて思いました。振り込め詐欺の話は坂田に「先生」をやってほしいというところから始まったのだ。

「そういう寂しいお年寄りを相手に、セールスマンは、どう会話すべきか。これまでは主婦や普通のサラリーマンが相手のセールストークをあたしは教えてきた。でもこれからはお年寄りの時代よ。お年寄りの心をつかむにはどうすればいいか。それを直感でわかっているのがあなたなの」

「セールスって何を売るんです？」

「お年寄りに一番需要があるのは健康器具。安眠枕とか、腰痛や肩こりにきくベッドマット、あとは健食、いいわ。健康食品よ」

坂田は考えこんだ。

「でも心配しないで。あなたが売るわけじゃない。売る人たちに心がまえを伝授するだけ。お年

寄り知らない人にはなかなか心をひらかない。振り込め詐欺なんて、それを逆手にとっているわけだから」

そういわれてみればそうだ。息子だと思いきんでいなければ、知らない男からかかってきた電話には本能的に警戒する筈だ。そのいっぽうで、「オレだよ、オレ」といわれて無条件に信じてしまうのは身内に対する安心感が強いことを表わしている。

坂田自身、めったにはないが、外から家に電話する用があると、

「あ、俺だけど——」  
と喋ってしまう。

「大事なものは、セールスマンではあるけれど、本気であなたの健康のためにいいものがありま、それを使って下さいって勧めていると伝わることなの。へらへらしていたり、口ばかりでお若いだの元気だのといわれたって、誰も信用しないし、まして財布のヒモをゆるめない。坂田くんみたいに誠実で、本当にお年寄りひとりひとりの気持がわかるんじゃないや、訪問販売なんてできないのよ」

「それってちゃんとしたもののですか」

「もちろんよ。あなたの人柄を見こんでお願いするのに、そんないいかげんな品物の販売の手伝いなんて頼みません」

坂田は黙った。年寄り相手の訪問販売というのがどこかひっかかる。

「テレビでやってる通販番組なんて、原価の十倍くらいで売りつけてるものもあるのよ。それに比べたらよっぽど安いし、良心的。皆、テレビでやっていると確かなもので、訪問販売だったら

インチキ臭いって思うかもしれないけれど、考えてみて。テレビで宣伝するのに、いったいいくらかかるか。その費用が全部値段のつかっていて、しかも損をしないとったら、どれだけ上乗せされてるか」

「それはわかります」

いやしくも宣伝マンだ。通販番組が、「こんなにお得！」といくらやっても、それが眉ツバであることくらい承知している。

「そうだ、こうしよう。まずあなたが、あなたに教育してもらいたいセールスマンが売る品をもってくる。一週間でも十日でも預けるから、あなたなりご両親なりがつかってみればいい。それで納得したら、講師をひきょうしてくれる？」

「品物を？」

「そう」

ここまで話を聞いておいて、この場で断わるのは難しい。玉井にいわれ、即答しなくてよいとわかって坂田はほっとした。

「わかりました」

「携帯の番号を教えてください」

教えると、玉井がアクセサリーのいっばいだった電話で坂田の番号を押した。

「これがあたしの番号。メモリーしておいてね。二、三日うちに連絡します」

「はい」

玉井はにこっと笑った。いきなり右手をさしだす。

「握手。たとえ断わられても、坂田クンと話せてすぐよかった。まだあなたみたいな人が東京にいるんだってわかったから」

「いえ、こちらこそ。勉強になりました」

坂田は玉井の手を握った。一般的な握手より、やや長い時間、玉井は坂田の手を握っていた、ような気がした。

立ち上がりかけ、玉井は、いけないと手で口をおおった。

「あたしったら、一番大事なことを話してなかった」

坂田は玉井を見つめた。

「お礼よ。ギャラのこと。もしあなたが講師をひきうけてくれたら、いくらお払いしなけりゃいけないかって話」

「それは……」

「一回につき、五万円どうかしら。生徒はだいたい五人から十人が対象なの。二時間くらい話してもらえばいいわ。一回じゃきつと話しきれないだろうから、二回でワンセット。評判がよかつたら、二カ月でワンセットくらいのパースでお願ひして、場合によっては地方に行くこともあるかもしれない。そのときはお休みの日を選ぶ。東京だったら、平日の夜。交通費はもちろん別でお支払いします」

「二時間で五万円ですか」

坂田は驚いた。

「二時間ずっと喋る必要はない。一時間喋って、あとの一時間は質問をうけつける。大丈夫、ど

んな感じで話を進めればいいかは、あたしが叩き台を作るから。簡単なカリキュラムみたいな形にして」

玉井は坂田を安心させるように頷いた。

「そんなお金になるようなことを、僕が教えられるとは思えないんですけど」

さすがに心配になってきた。

「僕はふつうの人間です。きつときた人たちをがっかりさせてしまいます」

「それを考えるのはあなたじゃなくて、あたしの仕事。あたしがあなたにできると思ったのだから、必ずできる」

坂田の心配とはあべこべに、玉井は自信たっぷりといった。

「そんなことをいわれても」

「いい？ もしここであなたが、簡単に、『俺に任せて下さい』というような人だったら、逆にあたしは頼まない。あなたが誠実で、人を失望させたくないと思うような人だからこそ、お願いしているわけ。その性格がすべてなのよ。その性格だからこそ、お年寄りの気持がわかって、信頼してもらえるの。とにかく、品物を送るから、考えるのはそれからいいでしょ」

「あの、その品物の代金は？」

「馬鹿ね。そんなのただに決まってるじゃない。送りつけておいてお金を要求したら、それこそ押し売りだもの」

玉井は坂田をにらんだ。

「それとも、あたしがこんな風だから信用できない？ いつておくけど、講習会では、きちんと



スーツを着て、ふつうの言葉づかいをしてるわよ」

「あ、いえ。そういうことではないんです」

「だったら信用して」

頷く他ない。まだここでためらってみせたりしたら、豹変ひょうへんしそうで、それも恐い。

「そう、それでいい。誠実なことで優柔不断なことは、まったく別なんだから。じゃ、あたしいくわ。坂田くん、コーヒーにぜんぜん手をつけていないでしょう。ゆっくり飲んでから帰りなさい。コーヒー代のことほもちろん心配しないで。払って帰るから」

テーブルの上の伝票を手にとり、玉井は立った。

「それじゃあ。お時間をとっていただいてありがとうございます。ご連絡します」

最後はひどくあらたまった口調になって玉井はいった。

あつという間だった。玉井は喫茶店をでていき、坂田はひとりテーブルに残された。

ため息を吐き、坂田はぬるくなったコーヒーを口に運んだ。

できるわけがない、と思う。だいたい人が前で喋るのが得意ではない。会議でのプレゼンテーションだって、何度していてもいまだに緊張してしまう。

それが一度も会ったことがない、まして自分より年上の人もいるであろう場で、偉そうに「講師」などできっこない。

一回につき五万円という、玉井が口にした報酬ほうしゅうもかえって気を重くさせる。そんな金額に見合うような内容が自分の話にある筈がないのだ。

叩き台を玉井は作ってくれるといったが、坂田と話していたのはせいぜい十分かそこらだ。そ

のていどの内容で、一時間の授業の叩き台になるとは思えない。その上質問をうけるというのが恐怖だ。訊かれたことに答えられず、しどろもどろになるのは見えている。

無理だ、やれっこない。

今この場からでも電話して、断わろうかと思った。

玉井のいう品物が届いてから断わったのでは、まるでその品物をネコババするのが目的だったように思われるかもしれない。

携帯電話をとりだした。

ボタンを押しかけ、迷った。

あなた天才ね、という玉井の言葉がよみがえった。

あなたみたいなのがセンベイ屋さんで働いているなんて宝のもちぐされだわ。

おおげさだ。だがそのいっぽうで、お年寄りの気持がわからない人が多いのも事実かもしれない、と思う。

祖父と時間を過ぎた経験を、坂田は特別なものだと考えたことはなかった。が、学校でも会社でも、年寄りと同居した経験をもち人間が意外に少なかったのは事実だ。

嫌われるまではいかなかったが、祖父は面倒がられていた。もともと短気な上に、酒が入ると、やたらに相手を罵倒ばとうする。悪気がないことはわかっているから腹を立てる家族はいなかったが、うるさいのはうるさい。

結果、坂田がその相手をつとめる時間が長くなった。

相性というものかもしれない。祖父のべらんめえ口調が嫌いではなかった。

勇吉、勇吉、と呼びつけ、

「お前は本当にキンタマついとるのか、しつかりせい」と始終いわれていたが、叱られているという気はしなかった。将棋をしているときだけは、毒舌が消え、棋盤に真剣な目を注いでいた。酒を飲みながらしても、酔いで手をあやまることはなかった。亡くなる直前、父親に、

「勇吉はやさしい子だ。だがあれでなかなか根性もある」といったと聞いたときは、信じられなかった。やさしいのは認めるが、根性はない、と自ら思っていたからだ。

今は――。

あるかもしれない、と思うときもある。

それは大阪や北海道でトラブルに巻きこまれ、逃げたくて逃げたくてしかたなかったのに、それこそ泣きべそをかきながら、でも、逃げなかつた経験があるからだ。

だからといって勇気があるとはこれっぽっちも思わない。喧嘩なんて絶対しない。いい争いすら好きではない。

また、ため息がでた。

やっぱり優柔不断じゃないか。この場から電話をして断わることすらできない。

まあ、いい。玉井は坂田の住所を知らない。

品物を送るためには、それを訊ねる電話をしてくるだろう。そのときに断わろう。

坂田はコーヒーを飲み干し、立ち上がった。

### 3

喫茶「ブラジル」の入ったビールをでたところで、坂田の前に二人の男が立ち塞がった。二人ともスーツにネクタイをしめていて、サラリーマンのようだった。

「すみません、ちょっとよろしいですか」

ひとりひよろりとして背が高く、眼鏡をかけている。もうひとりはずんぐりとして豆タンクのような体つきだ。声をかけてきたのは、ひよろりのほうだ。

なんだかやけに呼びとめられる日だ。坂田が声をかけた男の顔を見返すと、目の前に黒い革のケースが掲げられた。

「警視庁の者です。ちょっとお時間をいただけますか」

坂田はあらためて男たちを見た。

今までの人生で見た刑事は、大阪府警と北海道警の、どちらも暴力団担当刑事で、やくざと見まがうような、ガラの悪い風貌だった。

それに比べると、しごくふつうに見える。

「刑事さん、ですか」

ひよろりは頷いた。「豆タンクがいう。」

「どうする？ 交番いくか。立ち話も何だろう」

坂田に向けられた言葉ではなかった。

ひよろりが首をふった。

「いや、容疑者でもない人を連れていっちゃ申しわけない。といって、今、コーヒーを飲んできたばかりですよね」

坂田は瞬きした。なぜコーヒーを飲んでいたら知っているのだろうか。

「じゃ、あそこかどうか」

豆タンクが通りの向かいを示した。駅前のロータリーの一角にベンチがいくつか並んでいる。夜なので、人は少ない。

「いいですか、そのベンチでも」

「あ、はい」

坂田は頷いた。

三人は通りを渡った。玉井はとうに帰ったのか、特徴のある紫色の革ジャケットはみあたらない。

ベンチにひよろりと坂田は並んで腰をおろした。豆タンクがかたわらに立ち、あたりに目を配っている。

「突然で失礼しました。私、警視庁の捜査二課に所属している松川と申します。こっちは森末です」

「あ、坂田です」

「坂に田んぼでよろしいですか。下のお名前は？」

「勇吉です」

字を説明した。松川は上着から出したメモ帳に書きとめ、

「この字ですかね」

と確認した。

「はい」

「今日はお勤めですか？」

豆タンクの森末が立ったまま訊ねた。

「いえ、あの、ボランティアみたいなことをして……」

「ボランティア？」

「この地元に『つるかめ会』というお年寄りの集まりがあって、それに参加していたんです」

「何をしてらしたのですか」

「ええと、将棋をさしたり、あとお話をしたり、とか」

「お勤めはこの近くですか」

ひよろりの松川が訊く。

「いえ。ササヤ食品です」

「ササヤというと、ポテトチップスで有名なササヤですか」

「そうです、そうです」

「大企業ですな」

感心したように松川はいった。

「ササヤ食品のどちらにお勤めです？ セクションは」

「宣伝課です」

「落ちついてますね」

いきなり森末がいった。

「え？」

「ふつうのお勤めの方は、私らのような人間と話すとき緊張されるものです。緊張されて、たいていは、いろいろなことを自分からお話しになる。会社はどちらですか、と訊いたら、名前だけじやなしにどの部門でどんな仕事をしておられるか。勤続何年である、とか。坂田さんは訊かれたことだけに、簡潔にお答えになっている。若いのに落ちついていてると思えますよ」

「そうですか」

「警察にお知り合いでも？」

松川が訊いた。

「いえ」

坂田は首をふった。大阪と北海道であった話をここでしてもしかたがない。かえって疑われ、あれこれ探られるのも嫌だ。

「まるでいません」

松川と森末は目を見交した。

「あの、何でしょうか」

坂田は二人の顔を見比べ、訊ねた。

つかのま、沈黙があった。

「今、その『ブラジル』という喫茶店におられましたよね」

松川がいった。

「はい」

「どなたかとお茶を飲んでおられた？」

「はい。『つるかめ会』のメンバーに身寄りのいる人に駅前で声をかけられて」

「坂田さんも身寄りの方がおられるのですか？」

坂田は首をふった。

「僕は、半分仕事で、半分ボランティアです」

「仕事？」

しかたなく「超薄焼き・パリパリ」と「ふわふわアラレ・やわらくん」の話をした。

「ほう。最近食品会社もたいへんですな。テレビでコマースヤルを流せばいい、というものはないんだ」

森末が感心したようにいった。

「若い方とちがってお年寄りは消費行動がかたよりがちなんです。新製品がたと知っていても、それまで買っていたものからなかなかシフトして下さらない。そこでこちらからお届けしようというわけです」

「しかしそんな地道なやりかたで売れゆきにつながるものですか」

松川は首をひねった。

「もちろんすぐにはつながりません。しかしお年寄りのクチコミというのはすごいものがあるんです。例えば朝の公園とか商店街の縁日とか、ひとり暮らしでも家族がいつしよでも、お年寄りが自然に集まる場所というものがありません。そこで顔見知りですが情報交換をされて、じわじわと評判が広がるのではないかと期待をしています」

「とげぬき地蔵の縁日みたいなものですか」

森末がいうと、松川が、

「何だ、それ」

と訊いた。

「巢鴨にとげぬき地蔵ってあるだろう。毎月四のつく日だけ、縁日をやっているんだけど、なんだか年寄りがすごくなるんだ」

「へー」

「リサーチにいきました。あの縁日は、お年寄りの参拝客に特化した商品構成をされていて、それがまた評判を呼んで、お年寄りが集まるんです」

「トッカした商品構成？」

松川が訊いた。

「お年寄り向けのあたたかい肌着だとかショール、それに杖やショッピングカート、あと佃煮や古い流行歌のカセットテープ、和菓子なんかです。とげぬき地蔵の縁日でなければ、見つけるのに苦労するような商品もあります」

坂田は答えた。

「じゃ、そこで配ったら？」

「それも考えましたし、実際、ブースをだしてやってみたんですが、ただで配られては困る、という話もあって」

「なるほど。他は食いのとかを売っているのなものな。確かにただじゃ営業妨害みたいなものだ」

「ええ。といって、ササヤだけのブースで売っても、お客さんは通りすぎてしまうんです」

「それで老人会というわけか」

「はい」

「で、そのお茶を飲んでいた人ですが、よく話をされるのですか」

「いいえ、初めて、ちゃんと話しました」

「さしつかえなければ、どんな話だったのか、お聞かせ願えますか」

「あのおう、講師をしてくださいなかと頼まれました」

「講師？ 何のです？」

「ええと、お年寄り相手に訪問販売をするセールスの仕事をしている人を対象にした講師です」  
森末が顔をしかめた。

「え、よくわからない。お年寄り相手の講師じゃなくて、お年寄りを相手にした——」

「訪問販売のセールスをするんです」

「つまりセールスマンの教育？」

「そういうことだろうと思います」

「なぜ、坂田さんにそれを頼んだのですか」

「わかりません。玉井さん、その方は玉井さんとおっしゃるんですが、玉井さんは、営業マンを対象にした講習会をよくしてらっしゃるみたいです。それで、『つるかめ会』にお邪魔しているときの僕を見ていて、お年寄りの気持がわかるから、と」

「年寄りの気持がわかる……」

あきれたように松川がつぶやいた。

「べつにそんな特別なものは何もない、と思うんです。ただ、僕は子供の頃、祖父にかわいがられていたものですから、お年寄りと話するのが、わりと好きなんです。それで、だと思えます」

坂田はしどろもどろになった。玉井に頼まれたことは、こうして第三者に話していても、いかにも自分には不可能に思えてくる。

「つまり年寄りの扱いがうまい、ということですか」

森末が坂田を見つめた。

「そういういいかたをすると語弊ごへいがあります。お年寄りが扱いにくいみたいじゃないですか」

「そこだ」

松川がいった。

「何が」

と森末が松川を見た。

「俺らは、何となく年寄りを面倒くさいものだと思ってる。一段低く見てるかもしれない」

松川がいった。

「俺は別に年寄りを馬鹿にしちゃいない」

「でも面倒なときもある。話を通じなかつたり、通じたら通じたで、くどかつたり」

「そういうもんだらう、年寄りって」

「その十把ひとからげな目はよくないです」

坂田はいった。松川と森末は話を止め、坂田に視線をやった。

「お年寄りと子供というのは、どこかひとくくりにされがちなんです。でもそれぞれ個性があります。特にお年寄りは、若いときには事業をしたり、責任を負った仕事をしてこられた。なのにリタイアしたとたん、名前やキャリアもなくなって、『おじいさん』とか『おばあさん』と呼ばれる。自分がそう扱われたら嫌だと思いませんか」

二人は目を丸くした。

「なるほど。その通りだ」

「あたり前のことだけど、意外と気がつかなかった」

素直に認められ、かえって坂田は照れた。

「いえ、あの、まあ、そんな話をしろ、ということだと思っんです」

「わかる、わかる。変におべっか使って『お若いです』とかいうセールスマンより、こういう真面目に考えている人間の気持のほうが通じるわ」

森末は深々と頷いた。

「いいとこに目をつけたもんだ、お玉の奴」

「お玉？」

「いやいや。で、坂田さんは、やられるんですか、講師を」  
「いえ。とても僕には無理なんで断わろうと思っています」

松川と森末は目を合わせた。

「具体的に、いつ、どこで、と決まっていますか」

坂田は首をふった。

「まだ、何も。僕が迷っているので、セールスの人がどんな商品を扱うのかを見てから考えてほしい、といわれました」

「するとまた、今後も玉井さんに会われるわけですか」

「まあ、会うかどうかはわかりませんが、連絡はいただくことになっています」

不意に松川が身を寄せてきた。

「それ、引き受けてもらえませんか」

「ぜひお願いします」

森末もいった。

坂田は驚いて二人の顔を見返した。

「なぜ、ですか」

「さっき、お玉、と彼のことを呼びましたが、玉井早雄はやおというのが本名で、通称は『くねりのお玉』と呼ばれています」

「ベテランの詐欺師です」

「えっ」

「おネエ言葉を駆使して、女性の資産家に近づき、投資話やら何やらで金をひっぱる。そっちの趣味が本物なのかどうかは不明ですが、プロの詐欺で何十年も飯をくっている男ですよ」

「玉井さんが詐欺師」

「奴がからんだ件は、割に大口が多い。何万、何十万なんてケチな詐欺じゃなく、何百万、何千万、ときには億単位の詐欺も働いている。ただなかなか巧妙で尻尾をつかませない。我々が動く、というわけだからそれを察知して、さっさと逃げちまうんです」

坂田は呆然と聞いていた。

「でも、玉井さんは振り込め詐欺のことをいろいろいってました」

「そりゃ自分が怪しく見えるとわかっていいるからです。先手を打ったんです」

「そう、なんですか」

「お話を聞いてますと、どうやらお玉は新しいヤマを踏む準備をしているようです」

「新しいヤマ？」

「犯罪ですよ。詐欺というのは、いろいろ下準備が必要だ。それにとりかかっている、あなたを巻きこんだにちがいない」

「でも僕をだましてもお金になりません」

松川が苦笑した。

「坂田さんから金品を巻き上げようとしているのじゃありません。考えられるのは取りこみですな」

「取りこみ？」

「あなたを講師にして、老人向けの訪問販売のセールスマンを集める。そこに老人向けの商品を扱っているメーカーの人間も呼ぶわけです。実は生徒のセールスマンというのもグルで、しかし講習を受けると、がぜん売れそうな印象がある。歩合で商品を卸さないか、とメーカーにもちかけるんです。初めは十とか二十の単位で、やってみると瞬く間に売れ、講習会もたびたび開いて、セールスマンはさらに増える。今度は百単位だ。それも売ってしまう。しかも、さっきあなたのいったクチコミという奴で、商品の評判がすごくいい、どんどんヒキがある、セールスマンもさらに増やすんで、今度は千、万単位で商品を卸してくれ、ともちかける。メーカーは大喜びです。商品を卸す」

「どろん、です」

森末がいった。

「商品はどこかに消える。製品シールやらパッケージをとりかえて国内、あるいは海外で売られる。被害はざっと四、五千万、いや億かな」

坂田は言葉もでなかった。

「あなたは一流企業の社員で、見るからに誠実そうだ。そういう人を講師にしてセールスの教育をしているとなれば、信用も増します」

「でも、でも」

「あなただから目をつけた。これが口八丁手八丁の、見るからにセールスマンだったら奴は選ばない。あなたが先生をしてこそ、講習会は本物らしくなるわけです」

そういうえば「誠実」という言葉を、玉井は何度か使った。

「ずっとお玉に目をつけてたんです。今度こそ逃がさない」

森末が決意のこもった口調でいった。

「タネ銭があるのはわかってました。詐欺というのは、大がかりであればあるほど、元手が必要です。携帯電話をかけまくって何とかしようというケチな振り込め詐欺とはワケがちがいます」

「そのタネ銭をどうつかって、何をおっ始めるか、我々はずっと監視していたんです」

「お玉をつかまえるチャンスだ」

「坂田さんさえ協力してくれるなら、奴をパクれます」

坂田は口を開け、閉じた。そんなことできっこありません、という言葉が喉につかえている。ただ講師をひきうける、というだけでも無理だと思っていたのに、ひきうけるフリをして詐欺の摘発を手伝うなんて、自分にはできるわけがない。

「電話番号は聞きましたか」

「あ、はい」

「教えて下さい。それと坂田さんの番号も」

しかたなく、坂田はしたがった。二人は画面の番号を見ながら、慎重にメモした。

「次にいつ玉井とは会うことになっているんです？」

松川が訊ねた。

「いや、それは決まってません。たぶん、僕の家を訊くために連絡をいただくことになると思います」

「住所を。何のためです？」



「あの、商品をつかってほしいといわれました。訪問販売と聞いて、僕もちょっと迷ったんです。そうしたら、使えば怪しい商品じゃないとわかるからって」

「お玉の奴、もうターゲットを絞ってるな」

森末が松川にいった。松川は頷いた。

「送られてくるのは、きつとちゃんとした品物です。心配ない」

心配なのはそういうことではない、と思いつながらも、坂田はいい返せずじまい。

「坂田さんの協力は絶対に不可欠です」

森末がいう。

「でもそこまでわかっているのなら、なぜつかまえないのですか」

「証拠がないからですよ」

あたりまえのように森末がいった。

「これまでの犯行でも、お玉がリーダー格であったことはわかっています。しかしそうだと思われないような立ち回りかたをして、うまく逃げている。過去のヤマであいつをパクっても、本人が認めない限りは立件が難しいんです」

「もちろん本人が認めるわけがない。でも今度はちがいます。坂田さんの協力さえあれば、警察は頭からお玉の詐欺を見張ることができます。本当は売ってもいないのに仕入れた商品を『売れた』といって代金を払う、そのくり返してメーカーを信用させ、大量取引にもちこむまでの過程を一から十までおさえることができるんです。今まであいつの詐欺にだまされた人たちの仇うちにもなる」

「自信がありません」

「いいんです、それで。きつとお玉もあなたのそういうところを見てひっぱりこんだんです」

坂田はため息を吐いた。頭が混乱しているが、何だかともないことになっているというのだけはわかる。

「でも、もし僕が警察に協力したとわかったら、恨まれるんじゃないか」

「大丈夫です。わかったときは奴は檻おろの中だ。それに詐欺をやっているくらいですから、暴力沙汰には縁のない人間です。お礼参りとかの心配はありません」

「お礼参り？」

「仕返しのことですよ。それがばれたら厳罰だ。やりはしません」

「でも……」

「詐欺師というのは、極道なんかとちがって、ム所に入っても一円にもなりやしないんです。やぐざは、服役すれば、それが組のシノギにからんでなら手当もですし、出所してからの待遇も悪くはない。つまり服役も仕事の一部なんです。でも詐欺師というのは、シャバにいなけりやまるで稼かせぎになりません。それに詐欺でパクられたっていう前歴は、あいつらにとって致命的です。詐欺の前科のある奴が何か儲け話をもってきてても、誰もまともにはとりませんからね」

「つまりそれだけ刑務所が恐いんです」

「お礼参りをすれば、服役期間は延長されます。そんな面倒なことは絶対しません。犯行の否認もできなくなる」

「あのおう、考えさせてもらえますか」

「もしかして全部断わればすむ、と思っていませんか」  
松川がいった。

「え？ それは……」

「いっておきますが、お玉は簡単にあなたをあきらめない。奴の仕事にとって、これ以上はないというくらい材料です。カモを信用させるのに、あなたはぴったりなんだ。あの手この手でいくるめ、講師にひっぱりだそうとする」

「そう、そして講師をひきうけたら最後、あなたは奴の犯罪の片棒を担いでも同じだ」

森末が腕を組み、見おろした。

「そんな」

「あなたが何も知らなければ、善意の第三者で通るでしょう。しかし今日ここで、あなたはお玉が詐欺師であると知ってしまった。知った上で、奴の主催する講習会にでたら、共犯と同じだ」

「ま、待って下さい。そんなことをいわれても——」

「だから引き受けるんです。お玉のいう通り、セールスマン相手の講習会をやって下さい。私らがあきつちりそれを監視します。ビデオカメラだって回します。そうすりゃ奴の首根っこをおさえとも同然だ」

「何だか自分も首根っこをおさえられているようだ。全部断わって逃げてしまおう、と考えたのは事実だった。さすがに刑事だ。見抜かれている。」

「引きうけてくれますね」

念を押すように松川がいった。

「わかりました」

やむなく坂田はいった。

「よかった！ ありがとうございます。お玉をパクったあかつきには、感謝状がでるように上にかけあいます。会社でも自慢できますよ」

そんなものは欲しくない。

「あと、これは必ず守っていただきたいのですが、私たちのことは、誰にも秘密にして下さい」

「お玉だけじゃなく、家族やお友だちにも、です」

「はあ」

「用心深いお玉のことですから、本番に入る前に、坂田さんの周辺をいろいろ調べると思うんです。刑事と接触していたなんて話がでてきたら、すっ飛んで逃げるでしょうから」

坂田は頷いた。

「では、折りをみて、またこちらからご連絡します」

松川は立ちあがった。

「あの、僕から連絡するにはどうすればいいんでしょうか」

「警視庁の捜査二課にご連絡いただければいいのですが、いちおう携帯の番号をお教えしておきましょう」

森末がいった。

番号を自分の携帯電話にメモリーする。詐欺師とそれを追っかける刑事の番号が、一日でメモリーに加わった。

「じゃ、くれぐれもよろしく」

松川はいつて、森末と目を見交した。坂田を残し、駅の構内に入っていく。パトカーじゃなくて、電車で移動しているんだ。それを見送り、坂田は思った。

考えてみればあたり前だった。たとえ覆面パトカーだろうと、車で移動していたら、駐車場所に苦勞する。まして監視する相手が電車で動いていたらなおさらだ。

北海道や大阪の刑事は車で移動していたが、それは土地柄と、相手のやくざも車で移動していたという理由があったからだ。

それにしても厄介なことになった。出張先ではひどい目にあっても、まさか地元の東京で、こんな犯罪者や刑事とかかわるような羽目になるとは思ってもいなかった。

だが今度は詐欺師だ。大阪のやくざやロシアマフィアというわけではない。

暴力沙汰を嫌う、と松川もいつていた。殴られたり銃をつきつけられたりした、過去二回とはちがうだろう。

だとしても、そういう犯罪とおよそ縁がない筈の老人会のボランティアで、なぜこんな状況が生まれてしまうのか。

坂田は思いきり、誰かを恨みたい心境だった。

#### 4

玉井から電話がかかってきたのは、三日後の火曜日の夕方だった。

携帯の画面に表示された「玉井」という文字を見たとき、坂田の心臓は一気に鼓動を早めた。

「はい」

「坂田くん？ ごめんなさいね、連絡が遅れて……。例の品だけど、送ってもいいし、もしアレだったら、ご飯でも食べながら渡したいのだけど、どう？ そんな大きなものでもないから」

一瞬迷い、直接会ったほうがいい、と坂田は思った。自宅の住所を教えるよりはましだ。いくら暴力沙汰にならない、といわれても、両親や妹のいる家の場所は知られたくない。

「はい。それでけっこうです」

自然、あらたまった口調になった。

「じゃあ、明日は空いてる？」

「大丈夫です」

「坂田クンの会社はどこ？」

「ええと、虎ノ門です」

「じゃ、銀座も近いわね」

「はい」

「洋食、和食、何がいい？」

「何でもかまいません」

「おいしいお鮎屋さんがあるけど、どうかしら」

「わかりました」

「じゃ、場所と電話番号をいうから」